

行ってみ！チャレンジ 報告書

氏名 橋本 和弥

計画名 ベネチアでのホテルインターンシップ

渡航先 イタリア

計画申請日 2019年6月3日

計画終了日 2019年9月25日

1.渡航概要と目的

ベネチアのユースホステル「YOUTH VENICE PALACE」で3週間無償インターンシップを行った。宿泊客の対応や清掃を行ったほか、別の建物でリノベーション工事にも従事した。一方で、大量に押し寄せる観光客が引き起こす問題や環境問題の影響について街を歩いて考察した。

1日の主なスケジュール	
7:00	起床
8:00	現場へ移動,朝食
9:00	仕事
10:00	
11:00	
12:00	
13:00	
14:00	
15:00	昼食
16:00	自由時間
17:00	
18:00	
19:00	
20:00	
21:00	
22:00	
23:00	就寝



一日の主なスケジュールを表に示す。写真はホステル（上）、工事現場（下2枚）である。ホステルの写真は左から、偶然同時期に来ていた日本の学生、オーナー、私。

当初予定していたのはホステルでの仕事のみだったが、オーナーの要請で徒歩15分ほどにある古家のリノベーション工事も行った。現場で指示を出すのはイタリア人だが、ブラジルや南アフリカなど世界中から集まった人が働いていた。

作業は、崩した壁のがれきや下水管用に掘った穴の泥を袋に詰めて運んだり、材木を運搬したりなど重労働のためコミュニケーションがより重要となった。車が使えないため、運搬には台車を用い、回収業者の待つ船まで運ぶことはベネチアならではの不便さだった。

労働の報酬として給料の代わりにベッドと昼食を与えられていたので、低予算で長期滞在することができた。自由時間には観光ポイントのみならず、島中を歩き回った。

2.渡航先を通じて感じたこと、学んだこと

街全体を通して言えることは、やはり、恐ろしいほど観光客が多かった。主要な場所付近には団体ツアー客が何組も訪れ、常に混雑していた。そのため街中のいたるところにゴミ箱や灰皿が設置していた。さらに、一日中、島の清掃員とみられる方たちがあちこちで地面を掃き、台車を引きながら歩き回り、ごみを船に回収する、ということをしていた。ごみ回収だけでも相当な費用が掛かることが予想された。一方で、観光客のマナー向上のための対策も見受けられた。それは「#EnjoyRespectVenezia」の合言葉とともに観光客への注意喚起を示す掲示である。これは美術館や街中のごみ箱、水上バスの駅などいたるところで見られた。街中の掲示には、気候変動による海面上昇の危機を訴えるものもあり、ベネチアにおける環境問題の深刻さを学んだ。最も人が集まるサン・マルコ広場では、合言葉がプリントされたシャツを着た活動団体の人たちが、座り込む人や鳩にエサを与える人に対し注意をして回っていた。

しかし、それでも広場には散らばったゴミが目立っていた。街全体が「ディズニーランド化」していることから、劇的な効果を生むことの難しさを感じた。特に、見回りのいない所では座り込み禁止の掲示があるにも関わらず多くの人が座り込んでアイスなどを食べていた。ベネチアが美し過ぎるがために、「非日常」が人々のマナー意識を薄めていると感じた。だからといって、逆にマナー啓発のポスターだらけになると景観を損ないかねないため、バランスがとても難しいと感じた。自分もはじめは街の美しさに心を奪われていたが、日ごとにこういった問題に注意を払うことができるようになった。マナーを向上させることは、その地に暮らす人の気持ちに立って考えることが重要であるが、回りには観光客ばかりであ



ることで見られているという意識も薄くなり、マナー低下に繋がっているように感じた。このまま観光地として消費され続けていると、ベネチアが持つ美しさは失われてしまうという危機感を覚えた。

ベネチアで暮らす方に聞き取りをしたところ、ベネチアにいる人々のうち、ベネチア人は1%で、99%は観光客など外から来た人たちだという。いずれこれが100%になり、完全なテーマパークになってしまうのではないかという恐れがあるそうだ。また観光客と直接的なトラブルになったことはないが、観光客がこれからも増えることから、生活におけるプライバシーの不安や、水上バス料金や物価の上昇で、住民にはさらに暮らし辛くなっていることが分かった。そのため将来街がどうなるのか不安を抱かれていた。また大型遊覧船が訪れることで潟の侵食や大気汚染が発生するため住民の反対運動が起こったことを学んだ。

仕事は、ホステルのオーナーも工事現場のボスも適当な性格だったので、自分から聞かないと何も分からなかった。ホステルでは十分に物事を教えられないままオーナーがベネチア映画祭に行き、連絡が取れない状況で宿泊客の対応を一人で行わなければならなくなったことがあり、とても困った。お客様に事情をなんとか説明したところ理解を得られ、最終的に仕事を全うできたので、コミュニケーションの本質は言葉より気持ちであることを改めて感じた。

3. 今回の経験を今後どのように生かしていくか

今回の計画は、初めてアポ取りなどの準備から実行まですべて自分一人で行った。そしてホステルと工事現場の2カ所で働いたが、いずれも英語でのコミュニケーションが求められ、今までに無い緊張感や不安を抱いたが、無事に仕事をやりきることができた。3週間以上海外に滞在するのは今回が初めてだったこともあり、大きな自信になった。特に英語の力には不安があったが、伝えるために工夫し誠意を尽くすことで上手くいった経験は、今後、大学院や企業などで英語を用いることがあった際には忘れないようにしたい。

4. 今後本プログラムを希望する方へのアドバイス

行く前の準備が大切です。自分は現地では何をしたいかを明確にしておく、より良い時間を過ごせると思います。また、それ以上に現地での行動力も大切だと感じました。日本の感覚では予想がつかないことがたくさん起こるので、その場その場で判断することが重要だと思います。また、すれ違いを生まないためにも、しっかりとコミュニケーションをとることが大切です。

5. 主な支援金の使途

航空券代、交通費、保険代、携帯代、食費